

2025 年度 入学試験問題

国 語

(第 4 回)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校



【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私はまた、小学校の頃から『日本児童文庫』とか『小学生全集』とかの全集ものを読むことによつて、文学に親しんだ。それらは皆、今年八十九歳になる母が、いつの間にか黙って買い揃えてくれたものばかりであった。

母が父同様、私たちの勉強に対して指図がましい言葉を一切口にしなかったことは、前にも書いておいた通りである。県立の奈良高等女学校で当時としては割に近代的な教育を受けた母であったが、こと子供の勉強については見事に無干渉主義を貫いた。その代わり子供の勉強に好ましいと考えることは無言のうちに実行するというふうで、その点にかけては水も漏らさぬ周到さがあった。その一つが全集を揃えてやるということであつたわけだが、これにしても読書を強制するのではなく、あくまでも子供の自発意志を待つという態度であつた。自分の母親の自慢話をするようで気がひけるけれども、子供の教育環境づくりをただ黙々と行なうだけで勉強を決して無理じいしなかつた母の心遣いに、私は今でも心からの感謝を覚えないではいられない。

母が揃えてくれた全集の中で後々まで私に最も大きな影響を与えたのは、中学に入って読んだ夏目漱石全集である。外国文学の中にも感動させられた作品が幾つかあるが、こよなく愛読したのは、^①漱石の作品であり、これは今に至るまで変わらない。漱石の作品にはどれにも、持ち前の低徊趣味(漱石が俳人高浜虚子の『鶏頭』の序文で提唱したもので、世俗の労を避けて東洋的な詩的境地にゆとりをもつてひたろうとする趣味)が横溢している。それがたまらなく私は好きである。文章もその片言隻句に深い滋味が込められている。私は今でも自分の言葉で言いたいことのニュアンスを表現できないような時、とっさに漱石の作品中に書かれている言葉、例えば『吾輩は猫である』の苦沙弥先生の台詞などを口にしてしまうことがあるが、ともかくも、漱石の文章は、[※]齢とともに味わい深く感ずるようになった。

ところで、漱石が書いたものの中に『夢十夜』という小品がある。「自分」が夢に見たことを告白するという設定で、独自の文学境を描いた作品である。その『夢十夜』に、^②運慶が仁王の像を彫っているところを夢の中で見に行ったことが書かれているが、さて眼のあたりに見た運慶は、いとも無造作に仁王像を彫りすすめていくので、「自分」はえらく感心させられる。そのアくだりはこうである。

「能くああ無造作に鑿を使って、思う様な眉や鼻が出来るものだな」と自分はあんまり感心したから独言の様に言った。すると、[※]さっきの若い男が、

「なに、あれは眉や鼻を鑿で作るんじゃない。あの通りの眉や鼻が木の中に埋っているのを、

鑿と槌の力で掘り出す迄だ。丸で土の中から石を掘り出す様なものだから決して間違う筈はない」と云った。

自分は此の時始めて彫刻とはそんなものかと思ひ出した。果してそうなら誰にでも出来る事だと思ひ出した。それで急に自分も仁王が彫つて見たくなつたから見物をやめて早速家へ帰つた。

道具箱から鑿と金槌を持ち出して、裏へ出てみると、先達ての暴風で倒れた檜を、薪にする積りで、木挽に挽かせた手頃な奴が、沢山積んであつた。

自分は一番大きいのを選んで、勢いよく彫り始めて見たが、不幸にして、仁王は見当らなかつた。其の次にも運悪く掘り当る事が出来なかつた。三番目のにも仁王は居なかつた。自分は積んである薪を片つ端から彫つて見たが、どれもこれも仁王を蔵しているのはなかつた。遂に明治の木には到底仁王は埋つていないものだと思つた。それで運慶が今日迄生きてゐる理由も略解つた。(夏目漱石全集「筑摩書房刊」から引用し、現代仮名遣いに改めた)

中学生の私が、この文章をどのように読み取つたか記憶は定かでないが、漱石の全作品に描かれたどの場面よりも鮮烈な印象を受けたらしく、運慶と仁王の話は長らく脳裏から離れることがなかつた。それだけにとどまらない。その後、化学という学問を選びその中で自然との取っ組み合いを経験するうちに、この話が、いみじくも学問における創造のあり方を示唆してゐることに気がついてきたのである。それはこういうわけなのである。

例えば、水という物質が水素と酸素の化合物であり、その分子式が H_2O で表記されることはよく知られてゐる。けれども、その水素と酸素とが実際どのような姿で結合し合つて水という物質を成立させているかということになると、それを自然科学的に百パーセント認識するのは畢竟不可能なのである。すなわち、水のあるがままを自然科学的にとらえることが不可能なのである。水のA的認識はAにあり得ない。ではどうするか。自然科学的認識においては、それゆえ水そのものを直接組上[※]にのせるのではなく、水の模写^③(モデル)が、例えば水素と酸素のおのの原子がこのように化学結合し合い、各原子は一つの原子核を中心として電子がこのような状態で存在しているといったふうには、組み立てられる。液体の水は、このようにして組み立てられた水分子が互いに作用し合いながら構成してゐるとする。これを模写主義、あるいはモデル主義と呼ぶが、自然科学者は多くの場合、まず、この方法によつて自然認識を始めるのである。

さて、自然科学的認識において次の段階で行なわれるのは、こうして組み立てたモデルに対して論理的処理(思考を含む)をほどこすことである。モデルとその論理的処理、これによつて現象を解釈するための情報が得られる。そうして、この情報を土台にして理論が創られ、あるいは法則が発見されるわけである。

ところで、自然科学者は自然を認識する方法として実験を行なうが、その実験結果はAという

自然科学者が実験しても、Bという自然科学者が実験しても、何ら異なるところがないのはもちろんである。ところが実験結果の解釈という点になると、そうとは言いい切れない。AとBとの解釈がまったく異なるのはあり得ることだし、現に自然科学の世界において、それは日常茶飯事なのである。

なぜ学者それぞれに解釈が異なってくるのか。まず組み立てたモデルが人それぞれに違うからである。次に、そのモデルに対してほどこす論理的処理の違いも、解釈の差異につながってくる。そうすると、得られる情報も千差万別で、そこから理論の違いが生まれてくるわけである。

してみると、Aの立てた理論とBの立てた理論と、どちらがより真理に近いか、どちらにより普遍妥当性があるかを決定づけるのは、結局、組み立てたモデルをくらべて、どちらがより本物の自然に近いものを模写したかということと、どちらの論理的処理がよりの確であったかということにかかってくる。なかでも、認識の出発点であるモデルの組み立ては理論の広がりには決定的な影響を与えるので、自然科学者は自分が設定したモデルを凝視し、「自然はこんな簡明な姿をしているであろうか」、あるいは「こんな複雑な姿をしているものか」と、常に点検をくり返さなければならない。これは非常に難しいことである。その難しさは到底筆舌に尽くし難い。まことに④自然科学者各人の創造する理論の死活の分かれ目は、この困難をどこまで克服できるかにかかっているとでもいいくらいである。

そこで運慶と仁王像の話にもどる。

運慶が仁王を彫る手つきはいかにも無造作であり、荒削りであり、無遠慮であったが、そのように見えるのは、最初から木の中に埋まっている仁王を掘り出すかのような自然な、無理のない創造であったからにほかならない。自然科学における創造の理想的な姿も、かくあらねばならない、と私は思う。自然科学者は、モデルの組み立てにおいても、その論理的処理においても、無理があつてはいけない。極力不自然さを排さなければならない。さもなければ観測結果に対する解釈は歪み、意味のない情報を針小棒大に受け取り、逆に、重要な情報を黙殺し、あげくにはきわめて不自然な感じを与える、力でねじ伏せたようなぎくしゃくとした理論を構築してしまう結果になりかねないのである。そのような理論には、運慶が彫る仁王のような創造性は竟に現れないに違いない。

私は漱石の『夢十夜』の中のこの小品を、このように味わうようになった。以来、他の自然科学者が発表した理論に触れるたびに、「これは運慶の仁王のような感じのものか」という点に留意することにしてきた。化学反応に関する私の理論も、当時出されていた理論に接して「運慶の仁王」のような感じを受けていたとしたら、生み出されなかったはずである。⑤このことは後で少し詳しく述べようと思う。

⑥歴史を学び、文学に親しんだことは、自然科学に直接役立つたのではないにしても、漱石のこのような影響を思うにつけ、いろいろな意味で私の学問に対する姿勢に関与していることを、振り返って気づかされるのである。人間、学ぶことに無駄なものは何も含まれていない。学んだ

ことの何が、後になってもものをいうかわかったものでない。それゆえ、広く学ぶことが大切にな
ってくるのである。

※(福井謙一『学問の創造』より)

※横溢……あふれ出ること。

※片言隻句……ほんのちよつとした短いことば。

※齢……年齢ねんれい

※さつきの若い男……見物人の一人で、運慶をほめていた者。

※木挽……伐採ばっさいした木を角材や板に加工する職人。

※示唆……それとなく気づかせること。

※畢竟……結局

※俎上にのせる……まな板の上で調理すること。あるものごとを議論や批判の対象とすること
のたとえ。

※福井謙一……一九一八～一九九八年。化学者。一九八一年、ノーベル化学賞受賞。

問1 ——線ア「くだり」、イ「いみじくも」の文中での意味として最もふさわしいものを後か
ら一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

- ア「くだり」
- | | | | | | |
|---|-----|---|----|---|----|
| 1 | まとめ | 2 | 部分 | 3 | 続き |
| 4 | 関係 | 5 | 理由 | | |
- イ「いみじくも」
- | | | | | | |
|---|---------|---|-------|---|---------|
| 1 | おもいがけず | 2 | かろうじて | 3 | ふしぎなことに |
| 4 | まことにうまく | 5 | かりにも | | |

問2 ——線①「漱石の作品」を筆者はどのようなようにとらえていますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 何かを表現しようとしてもうまく言い回しが思い浮かばないとき、かたことでも東洋の詩を朗読することのできる漱石の作品は助けになる。
- 2 何かを表現しようとしてもぼんやりしたイメージしか頭に出てこないとき、東洋の詩の情景がありあろうかと思いうかぶ漱石の作品は助けになる。
- 3 何かを表現しようとしても微妙な意味合いが表せないとき、日常生活のわずらわしさから離れた詩情で満ちている漱石の作品は助けになる。
- 4 何かを表現しようとしても自分の考えが一般論にとらわれているとき、世間離れした思想がちりばめられている漱石の作品は助けになる。
- 5 何かを表現しようとしても感情が率直に伝えられないと感じたとき、理屈ではなくゆとりある東洋の詩情を持たせた漱石の作品は助けになる。

問3 ——線②「運慶が仁王の像を彫っているところを夢の中で見に行った」とありますが、「夢の中」でなくても起こり得ることは次のうちのどれですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 無造作に木を彫って仁王像が完成すること。
- 2 運慶が今日まで生きていること。
- 3 運慶が作った像を見て感心すること。
- 4 誰でも片っ端から薪を彫れば仁王が出てくること。

問4 二か所の空らん A には「他と比べようもなく」、「何があっても必ず」といった意味の同じことばが入ります。漢字二字で答えなさい。

問5 ——線③「模写（モデル）」と対になっていることばを文中からひらがな五字でぬき出しなさい。

問6 ——線④「自然科学者各人の創造する理論の死活の分かれ目」とありますが、なぜ自然科学の理論は一つではなかったり、良し悪しがあったりするのですか。その理由として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 実験結果が同じだったとしても、それをどうとらえてどう表すかは人の考えによって異なるため、結果として出される理論も一つではないから。
- 2 実験結果が同じだったとしても、それをもとに科学者がつくった理論を評価するのは科学者ではない人であり、その人たちの考え方は異なるから。
- 3 実験結果が同じだということは、科学的認識のモデルや解釈がたまたま一致したからそうなのであり、常にそうなるものとは限らないから。
- 4 実験結果が同じだということは、世界の真理であって人間の関われないことであり、人がつくった理論はとうてい真理にはおよばないから。
- 5 実験結果が同じだったとしても、人がつくった理論は時代とともに見直しが必要であり、常に点検をくり返さざるを得ない困難なものだから。

問7 ——線⑤「このこと」とありますが、この文章をもとにすると、どのようなことだったと考えられますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 筆者は化学反応の原理に関する画期的な理論をつくることができたが、当時すでに出されていた不自然な説明の理論を無視していたからこそ、自分の理論は生み出したのだということ。
- 2 筆者は化学反応の原理に関する画期的な理論をつくることができたが、すでに出されていた理論がきわめて自然な説明であることに気づけば、もっと早く自分の理論もできたであろうこと。
- 3 筆者が化学反応の原理に関する理論を生み出そうと苦労していたとき、「運慶の仁王」の話を思い出したために自然な考えをすることができ、画期的な理論を生み出すことができたということ。
- 4 筆者が化学反応の原理に関する理論を考えていたとき、当時出されていた理論にすぐれて自然な感じを覚え、自分も同じように説明すれば画期的な理論ができるだろうと確信したこと。
- 5 筆者は化学反応の原理に関する画期的な理論をつくったが、それはすでに出されていた理論に違和感を覚え、もっと無理なく説明できる理論はないかと考えたからできたのだということ。

(問題は次のページに続きます)



2 次の文章は菊池寛の小説「勝負事」の全文です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

勝負事ということが、話題になった時に、私の友達の一人が、次のような話をしました。

「私は子供の時から、勝負事というと、どんな些細なことでも、厳しく戒められて来ました。幼年時代には、誰でも一度は、弄ぶにきまっている、めんこ、ねつき、ばいなどというものにも、ついで手を触れることを許されませんでした。

『勝負事は、身を滅ぼす基じやから、真似でもしてはならんぞ』と、父は口癖のように幾度も幾度も繰り返して私を戒めました。そうした父の懸命な訓戒が、いつの間にか、私の心のうちに勝負事に対する憎悪の情を、培っていったのでしよう。小学校時代などには、友達がめんこを始めると、^① そつとその場から逃げ帰って来たほど、殊勝な心持ちでいたものです。

私の父が、いろいろな罪悪の中から、勝負事だけを、何故こんなに取り分けて戒めたかということ、私が十三、四になってから、やっと分かったことなのです。

私の家というのは、私が物心を覚えて以来、ずっと貧乏で、一町ばかりの田畑を小作して得るわずかな収入で、親子四人がかつかつ暮らしていたのです。

確か私が高等小学の一年の時だったでしょう。学校から、初めて二泊宿りの修学旅行に行くことになったのです。小学校時代に、修学旅行という言葉が、どんなに魅惑的な意味を持っているかは、たいていの人が、一度は経験して知っておられることと思いますが、私もその話を先生から聞くと、雀躍りしながら家へ帰って来ました。が、帰って両親に話してみますと、どうしても行ってもいいとはいわないのです。

今から考えると、五円という旅費は、私の家にとっては、かなりの負担だったのでしよう。おそらく一月の一家の費用の半分にも、相当した大金だったろうと思います。が、私はそんなことは、考えませんから、手を替え品を替え父と母とに、嘆願してみたのです。が、少しもききめがないのです。

もう、いよいよ明日が出発だという晩のことですが、私は学校の先生には、多分行かれない、と返事はして来たものの、行きたいと思う心は、矢も楯も堪らないのです。どうかして、やってもらいたいと思ひながら、執念く父と母とに、せびり立てました。とうとう、父も母もしつこい私を、持てあましたのでしよう、泣いたり、怒ったりしている私を、捨てて置いて二人とも寝てしまいました。

私は、修学旅行の仲間入りのできないことを、友達にも顔向けのできないほど、恥ずかしいことだと思ひ詰めていたものですから、一晩中でも泣き明かすような決心で、父の枕元で、いつまでもぐずぐず駄々をこねていました。

父も母も頭から、蒲団を被っていましたもの、私の声が、彼らの胸にひしひしと、応えていたことはもちろんです。私が、一時間近くも、旅行にやってくれない恨みを、くどくどといひ続けた時でしょう。今まで寝入ったように黙っていた父が、急にむっくりと、床の中で起き直ると、

蒲団の中から顔を出して、私の方をじっと見ました。

私は、あんまりいい過ぎたので、父の方があべこべに怒鳴り始めるのではないかと、内心びくびくものでいましたが、父の顔は怒っているというよりも、^②むしろ悲しんでいるといったような顔付きでありました。涙さえ浮かんでいるのではないかと思うような目付きをしていました。

『やってやりたいのは山々じゃ。わしも、お前に人並みのことは、させてやりたいのは山々じゃ。が、貧乏でどうにもしようがないんじや。わしを恨むなよ。恨むのなら、お前のお祖父さんを恨むがええ。御厩^{おうまや}では一番の石持ちといわれた家が、こんなになったのも、みんなお祖父さんがしたのじや。お前のお祖父さんが、勝負事で一文なしになってしまったんじや』と、いうと、父はすべての弁解をってしまったように、くるりと向うを向いて、蒲団を頭から被ってしまった。

私は、自分の家が御維新^{ごいしん}前までは、長く庄屋^{しょうや}を勤めた旧家であったことは、誰からとなく、薄々^{うすずす}聞き知っていたのですが、その財産が、祖父によって、蕩尽^{どうじん}されたということは、この時初めて、父から聞いたのです。むろん、その時は父の話を聞くと、^③二の句が継げないで、泣き寝入りになってしまったのです。

その後、私は成長するに従って、祖父の話を、父や母から聞かされました。祖父は、元来私の家へ他から養子に來た人なのですが、三十前後までは真面目一方であった人が、ふとしたことから、[※]賭博^{とばく}の味をおぼえると、すっかりそれに溺^{おぼ}れてしまって、何もかもうっちゃって、家を外にそれに浸^{ひた}りきってしまったのです。御厩^{ごいしん}の長五郎という賭博^{とばく}の親分の家に、夜昼なしに入り浸っている上に、いい賭場^{とば}が、開いているというのと、五里も十里もの遠方まで、出かけて行くという有様で、賭博^{とばく}に身も心も、打ち込んでいったのです。天性の賭博好きというのでしょうか。勝つても負けても、にこにこ笑いながら、勝負を争っていたそうです。それに豪家^{ごうか}の主人だということで、どこの賭場^{とば}でも『旦那^{だんな}旦那』と上席に座^{すわ}らされたそうですから、つい面白^{おもしろ}くって、家も田畑も、壺皿^{つぼざら}の中へ叩^{たた}き捨ててしまったのでしょう。むろん時々は勝ったこともあるのでしょうか、根^{しろうと}が素人^{しろうと}ですから、長い間には負け込んで、田畑を一町売り二町売り、とうとう千石^{せんごく}に近かった田地を、みんな無くしてしまったそうです。おしまいには、賭博^{とばく}の資本^{もと}にも、事を欠いて、祖母の櫛^{くし}や笄^{こうがい}まで持ち出すようになったそうです。しまいには、住んでいる祖先伝来の家屋敷^{いえやしき}まで、人手^{わた}に渡すようになってしまったのです。

が、祖父のこうした狂態^{きやうたい}や、それに関する逸話^{いっわ}などはたくさん聞きましたが、たいいてい忘れてしまいました。私が、今もなお忘れられないのは、祖父の晩年^{ばんねん}についての話です。

祖父が、本当に目が覚めて、ふつぷりと賭博^{とばく}を止めたのは、六十を越^こしてからだとのことでした。それまでは、財産を一文無しにしてしまった後までも、まだ道楽^{だらく}が止められないで、それかといつて大きい賭場^{とば}には立ち回られないので、馬方^{ばかた}や土方^{ひがた}を相手の、小賭博^{せうとばく}まで、打つようになっていたそうです。それを、祖母やその頃^{ころ}二十五、六にもなっていた私の父が、涙を流して諫^{いさ}めても、

どうしても止めなかったそうです。

が、祖父の道楽で、長年苦しめられた祖母が、死ぬ間際まぎわになって、手を合せながら、

『お前さんの代で、長い間続いた勝島の家が、一文無しの水呑み百姓みずのびやくしやうになってしまったのも、わしや運だと諦あきらめて、厭いといはせんが、せめて死に際に、お前さんから、賭博は一切打たんといい誓言せいごんを聞いて死にたい。わしは、お前さんの道楽で長い間、苦しませられたのだから、後に残る宗太郎やおみね（私の父と母）だけには、この苦勞はさせたくない。わしの臨終の望みじゃほどこに、きっぱり思い切つて下され』と、何度も何度も繰り返して、口説いたのがよほど効いたのでしよう、義理のある養家を、根こそぎ潰つぶしてしまつた我悔がかいが、やつと心のうちに目ざめたのでしよう。また年が年だけに考えもしたのでしよう、それ以来は、生まれ変わったように、賭博ばくちを打たなくなつてしまつたのです。

それで、六十を越しながら、息子むすこを相手に、今では他人の手に渡つてしまつた昔の自分の土地で、小作人として、馴なれない百姓仕事を始めたのです。が、今まで、ずいぶん身を持ち崩くずしていったものですから、そうした荒仕事あらしごとには堪たえなかつたと見え、二年ばかり経たつと、風邪かぜか何かがあるどで、ぼつきり枯枝かれえだが折れるように、亡なくなつてしまつたのです。

④ 一生いっしやうが涯、それに溺なれてしまつて、身にも魂たましにも、しみ込んだ道楽を、封ふうぜられたためでしょう。か、祖父は賭博を止めてからというものは、何となくほうけてしまつて、物忘れが多く畑を打ちながら、鋤くわを打つ手を休めて、ぼんやり考え込むことが多かつたそうです。そんな時は、若い時に打つた五百両千両という大賭博ばくちの時に、うまく起きてくれた賽さいころの目のことでも、思おもひ出していたのでしよう。

それでも、改心をしてからは、さすがに二度とふたたび、勝負事はしなかつたのです。もし、したことがあつたならば、それはただ一度、次にお話するような時だけだろうとのことでした。

それは、何でも祖父が死ぬ三月ぐらい前のことです。秋の X の午後に、私の母が田で働いている祖父に、おやつおやつの茶ちやを持って行つたことがあるのです。見ると、稲いねを刈かつた後の田を、鋤すき返しているはずの祖父の姿が見えないのです。多分田の向むかうの 藁堆＊わらにおの陰かげで、日向ひなたぼつこをしているのだらうと思つて、その方へ行つてみますと、果たして祖父の声が聞こえてくるのです。『今度は、俺おれが勝ちだ』と、いいながら祖父は声高く笑つたそうです。その声をきくと私の母は、はつと胸を打たれたそうです。きつと、古い賭博打ちの仲間が来て、祖父を 唆そそのかして、何かの勝負をしているに違ちがひない、と思つと、手も足も付けられなかつた祖父の、昔の生活が頭の中に浮うかんできて、ぞつと身が震ふるうほど、情けなく思つたそうです。せつかく、慎つつしんでいてくれたのにと思つと、いったい祖父を誘さそつた相手は、どこのどいつだろうと、そつと、足音あしおを忍しのばせて近づいてみたそうです。

見ると、ぼかぼかと日の当たっている藁堆わらたいの陰かげで、祖父とその五つになる孫まごとが、相對して蹲うつすまつていたそうです。何なにをしているのかと思つて、じつと見ていると、祖父が積み重なつている藁わらの中から、一本の藁わらを抜ぬいたそうです。すると、孫まごが同じように、一本の藁わらを抜き出したそうです。二人はその長さを比べました。祖父が抜いた方が一寸ばかりも長かつたそうです。

『今度も、わしが勝ちじゃぞ、はははは』と、祖父は前よりも、高々と笑ったそうです。それを見ていた母は、祖父の道楽のために受けた、いろいろの苦痛に対する恨みを忘れて、心からこの時の祖父を、いとしく思ったとのこと⑥です。

祖父が最後の勝負事の相手をしていた孫が、私であることは申すまでもありません」

※蕩尽……財産などを使い果たすこと。

※賭博……金品をかけて勝負を争う遊戯。

ここでの賭博は主に茶わん大の壺の中にサイコロを入れて、出た目の数を当てるもの。なお、これ以降同じ漢字で「ばくち」と読ませているところもある。

※藁堆……藁を高く積み上げたもの。

問1 ——線①「そつとその場から逃げ帰って来たほど、殊勝な心持ち」とありますが、それを説明したものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 勝負事を憎む思いから、友だち付き合いまでを犠牲にするような正義感の強いようす。
- 2 友だちに対する配慮をしながらも、父からの言いつけを守ろうとするけなげなようす。
- 3 勝負事への興味は捨てきれないものの、自分の意志を最後までつらぬく感心なようす。
- 4 家族の過去のあやまちを友だちに隠し、自分の弱みを見せまいとする勝ち気なようす。

問2 ——線②「むしろ悲しんでいるといったような顔付き」とありますが、この部分についての説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- 1 「私」のわがままに怒っているというよりも、息子を遠足に行かせたいと思うが、祖父が賭博ですべての財産を失ってしまったために、自分たちの力ではどうすることもできないとむなしく思っている。
- 2 「私」のわがままに怒っているというよりも、家が経済的に困窮していることを分かっているにもかかわらず、ひたすらに父母を責め立てる息子の幼稚さや思慮のないさまに呆れ果てている。
- 3 「私」のわがままに怒っているというよりも、息子を遠足にすら行かせてやれない自分のふがいなさに加えて、かつては庄屋まで勤めた旧家を立て直すこともできない情けなさを感じている。

4 「私」のわがままに怒っているというよりも、息子を遠足にすら行かせてやれないほどの生活の困窮の元凶は、祖父以上に祖父を賭博の道にそそのかした人たちにあるのだとやるせなく思っている。

問3 ——線③「二の句が継げないで、泣き寝入りになってしまった」とはどのようなことを言おうとしているのですか。それを説明したものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 父から初めて祖父の話を聞いた「私」は、家が貧乏になる原因をつくった人物が幼いころによく遊んでもらった祖父ただだけに、修学旅行に参加できないことに納得せざるを得なくなった。

2 父から初めて祖父の話を聞いた「私」は、今まで勝負事をきびしく戒められていた理由に合点がいったため、修学旅行のお金を出してもらうことは無理だと考え、我慢せざるを得なくなった。

3 父から初めて祖父の話を聞いた「私」は、修学旅行に参加できないほど家が貧乏になった理由におどろくと同時に、父親に泣きついても仕方がないことだと思いきらめざるを得なくなった。

4 父から初めて祖父の話を聞いた「私」は、貧乏の責任を一家全員で負わなければならぬという父の言い分を弁解にすぎないと感じたものの、反論することもできず従わざるを得なくなった。

問4 ——線④「それ」が指すものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 大賭博 2 荒仕事 3 道楽 4 財産

問5 ——線⑤「うまく起きてくれた賽ころの目のこと」とは、祖父が賭博に勝ったことについての比喩的な表現です。では賭博にのめりこんでいたことを比喩的に表現している部分はどこですか。文中より二十字でぬき出し、最初の五字で答えなさい。

問6 空らん X には「秋から冬にかけてのうららかな日」という意味の四字熟語が入ります。その読みをひらがな六字で答えなさい。

問7 ——線⑥「いとしく思った」とありますが、母がこのような気持ちになったのはなぜですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 祖母の臨終の望みに応えて大好きな賭博をやめ、元気をなくしていた祖父が、幼い孫とお金を賭けず、無邪気に勝負事を楽しんでいる姿を目にしたから。
- 2 母たちに対して面と向かって謝罪のことばを口にしてはいない祖父が、密かに孫の遊び相手になり、育児に協力していたとわかり、謝罪の思いが伝わってきたから。
- 3 孫を相手にした他愛のない勝負事でさえ、勝った時は心から喜び、大人げない大声を出している姿を目にして、祖父が勝負事を深く愛していたことがわかったから。
- 4 藁堆の陰から聞こえてきた声から、きっぱりやめたはずの賭博を祖父が密かに再開したと思い、違和感を覚えたが、それは誤りだったと後からわかったから。

- 問8 本文の内容を説明した次の1～6のうち、ふさわしいものを二つ選び、番号で答えなさい。
- 1 修学旅行にどうしても行きたかった「私」は両親に怒られるまで何度も何度もしつこくその参加をお願いしたが認められなかった。
 - 2 養子として「私」の実家にきた祖父はもともと真面目な人だったが、そのうち家にも帰らず賭博にのめり込むようになった。
 - 3 祖父は六十歳を過ぎてから賭博をやめて、再び畑仕事で生計を立てるようになった。
 - 4 祖父は当初、賭場ではおだてられる上客であったが、お金が底についていくにつれて家からは遠い賭場にしか行けないようになった。
 - 5 「私」の母は畑仕事をしているはずの祖父がこっそり昔の仲間を誘い込んで賭博をしていると勘違いをしてしまった。
 - 6 この文章では「私」という語り手の語りの中に、もう一人別の「私」という語り手が存在している。

3 次の詩および生徒たちの会話を読んで、後の問いに答えなさい。

青い花

草野心平

トテモキレイな花。

イツパイデス。

イイニホヒ。イツパイ。

オモイクラキ。

オ母サン。

①
ボク。

カヘリマセン。

ヌマノ水口ノ。

アスコノオモダカノネモトカラ。

ボク。トンダラ。

ヘビノ眼ヒカツタ。

ボクソレカラ。

②
忘レチャツタ。

オ母サン。

サヨナラ。

大キナ青イ花モエテマス。

(『定本 蛙』より)

Aさん 「ボク」って、だれなんだろうね。

Bさん 「オ母サン」の息子むすこなんだろうけど。

Cさん そりゃそうだ。

Dさん なんで「カヘリマセン」で「サヨナラ」なの。

Aさん なんでカタカナで書かれているのかな。日本語がすこしたどどしいようだけど。

Bさん 「イイニホヒ。イツパイ。オモイクラキ。」って、わけわからん。書きまちがいでしょ。

Cさん いや、これと似たのを前に見たことがあるな。昔の小学一年生の作文が、やっぱりカタカナだらけで、「わるうゑを」とか歴史的かなつかいだったよ。それがカタカナだと「ワキウエラ」になるらしい。だから、「いいにおい。いっぱい。」と書き

直せるね。

X

Dさん 漢字やかなづかいなど、国語のルールが大きく変わったのが一九四六（昭和二十一年）なんだってさ。この詩の発表は一九三八（昭和十三年）だそうだよ。

Aさん 「アスコ」は「あそこ」、「オモダカ」は植物の名前だよ。

Bさん もしかして、青い花が咲くのかい。

Aさん いや、花はたぶん白色だね。水辺に生える草で、草丈は三十〜五十センチ。水田や用水路に普通にみられるんだって。

問1 この詩の形式として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 文語定型詩 2 文語自由詩 3 口語散文詩 4 口語自由詩

問2 空らん X にあてはまることばとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 重いくらい 2 思い暗い 3 重い暗い 4 思いくらい

問3 ——線①「ボク。／カヘリマセン。」の理由として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 航空隊の兵士として戦争に参加していて、相手に勝つまでは家には帰れないと思っ
てるから。
- 2 母親とけんかしている最中だったが、がまんの限界を越えてしまい、これから家出する
つもりだから。
- 3 出かけるときはこんなことになるとは予想していなかったが、へびに食べられることにな
ってしまったから。
- 4 旅行先の外国に滞在してみると、今まで見たことのない魅力がたくさんあり、帰りたい
なくなってきたから。

問4 ——線②「忘れチャツタ」の理由として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 実は必ずしも忘れたわけではないのだが、経験したことの無い状況なので混乱していることもあり、どう説明すればいいかわからなくてこう言っている。
- 2 実は必ずしも忘れたわけではないのだが、家族や母親に対するはげしい反発心があり、困らせようとわざといじわるな言い方をしてこう言っている。
- 3 実は必ずしも忘れたわけではないのだが、正直に何もかも説明すると、家族や母親に居場所をつきとめられ、連れ戻されそうなのでこう言っている。
- 4 実は必ずしも忘れたわけではないのだが、今はこまかな報告が許されない事情があり、特に仲のいい母親にだけ、心配させないためにこう言っている。

問5 この詩について説明したものととして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

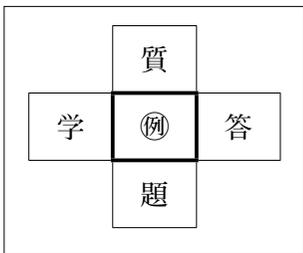
- 1 青い花に包まれ、親切な人々に見守られながら、若くして死んでいかなければならない。「ボク」の運命は、読者の涙を誘う。
- 2 青い花は現実の花というより、「ボク」がこれからめざしていく幸福な将来の理想のシンボルであることで、読者の共感を誘う。
- 3 青い花など実はどこにもありはしないのだが、偽りの花やかおりをさも本当らしく描く「ボク」の巧みな語りは、読者を信頼へ誘う。
- 4 青い花の美しさや濃密なかおりに注意をひきつけられ、あとのことは意識の片隅に追いやられてしまっている「ボク」のすがたが、読者の同情を誘う。

4 次の各問いに答えなさい。

問1 次の各文の——線のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 キリツを守って行動する。
- 2 先生の本ホジヨなしで逆上がりができた。
- 3 弓を的に向かってイる。
- 4 友達とはイシン伝心で何でも分かりあえる。
- 5 完全ムケツのスーパーヒーローになりたい。

問2 次の空らん①～⑤に漢字を入れるとそれぞれ二字の熟語が作れます。例にならってあてはまる漢字の部首名をひらがなで答えなさい。なお、あてはまる漢字はすべて小学校で習うものです。



例に入る漢字「問」 答え「くち」

